

10年後の未来のために 日本からAI研究・製品が世界に羽ばたくために..



Artificial intelligence (AI) 自体の概念は古くよりあり、“人間の知能に匹敵する機械が数年のうちに誕生するだろう”という記述がすでに1970年にはありましたがこれまでまだ実現していません (<https://sitn.hms.harvard.edu/flash/2017/history-artificial-intelligence/>)。しかしながら、deep learningがブレイクスルーとなったこの10年ほどのAIの発展のインパクトは大きく、日々の生活においてもいろいろな場面で着実な進歩を感じることができます。1980年代に自身の会社の製品であるシンセサイザーの宣伝文句に“AI”を使ったKurzweil博士が2045年にAIが技術的特異点をこえて人間の知性を凌駕するとしています、あながち実現不可能なことではないのではと個人的には考えています。さらにAIはヒトが予想していること以上に、自律的に進歩・発展していく技術のようにもみえます。

機械が処理しやすい画像をあつかう放射線医学に関わる我々は今後もAIに深く関係していきますが、AIに関わる研究や製品開発において世界に対してリードできるようになることが、日本の放射線医学の発展という観点では重要と思われます。RSNAなどの機器展示で日本からの製品のプレゼンスがいずれその指標になると考えます。本特集において、造詣の深い先生方に本邦でのAIに関する放射線医学研究がさらに盛んになるように、さらに研究から製品開発への流れが活発になるための取り組みや教育、制度等に対する提言などについてご執筆をいただきました。あらためてご執筆いただいた先生方に感謝を申し上げるとともに、少しでも本特集が会員の皆様のお役にたてることを祈っております。

国際医療福祉大学成田病院
桐生 茂

